

構造のエスプリは360°

構造家・正木健太

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■ブロック造の家

1969年和歌山県生まれ。構造家の正木健太さんが経営する正木構造研究所は今年20周年を迎えた。「ポジティブな意味の花言葉をもち、品種としても強いいちじく」をデザイナーの乙部なるみさんとコラボしたカードに託して、御礼とした。

お祖父さんが自ら建てたというブロック造の住宅で育ったことが、正木さんを建築の道へ誘ったのかもしれない。お祖父さんのコンクリートを練る姿が目につかぶという。図鑑が大好きな少年は、昆虫でも植物でも、形というものがどのようにつくられているかに興味をもってきた。

早稲田大学創造理工学部建築学科に進学してからは、コンピュータの桜井研究室に席を置き、修士過程へ進む。意匠設計の仕事をするのを漠然と意識していたのが、構造に行くことになったのは学んだプロセスから当然かもしれないと話します。

■柔軟さを学ぶ

構造家の梅沢良三さんとの就職面接では、そのときやっていた歌舞伎町のプロジェクトで一緒のリチャード・ロジャーズの話を一方向的に聞かせられて、終了しそうになる。慌てて「ワタン取ってもらえますか？」と聞いている正木さんと、おもむろに頷く梅沢さんが想像できます。それから8年間、建築家の代表作を数々受けてきた梅沢建築構造研究所に席を置いたのでした。設計はスタッフ一人がひとつを担当し梅沢さんと進めていく。大学院時代には避けていた構造設計の修行は所員になってからだ。ハードだったと思うがと聞く覇志堂に、「梅



沢先生は聞くことには丹念に答えてくれた」。世田谷プロジェクトをはじめ石山修武研究室を担当し、アーキテクト・ファイブ設計のとっとり花回廊も、イサム・ノグチ財団監修のモエレ沼公園にも携わった。そのために退職を一年延ばしたが、長い間、訪れる人々に愛されている建物に関われたことは大きな実績となったし、嬉しい。

梅沢建築構造研究所では海外研修もあるという佳き修行時代を過ごしたが、梅沢さんの仕事に対する『柔軟に対応する姿勢』を学べたことが一番の収穫だった。常に問題意識が高いからこそ、梅沢さんは柔軟性があるのだと思う。「正木さんは一番合う師匠に出会いましたね。」と覇志堂。

■ハーモニカと唄はロック

建築家は創立当時から『アーキテクト・ファイブ』の建築家やスタッフとの人脈、大学の同窓からの構造設計依頼がひきも切らない。プロトタイプの住宅メーカーの仕事もあるし、小住宅から10億円規模の住宅もありと設計の幅は広い。20世紀の建築や工業デザインに寄与したジャン・プルーヴェを知ってドキドキしてしまった。元々あった建築だけに特化せずに、オブジェなどアートのなものに対する興味が、さらに湧いた。特殊なオーダーに添った作品の構造検討ができるのが「面白い!」と思う正木さんだ。杉本博司さんといえば、トータルな美術や建築界で知られるアーティストである。杉本さんと『新素材研究所』を営む建築家の榊田倫之さんとの縁から、正木さんがヴェネチアビエンナーレ出展のガラスの茶室「聞鳥庵」の構造設計を担当した。引き続きアートに属する杉本作品の構造もサポートしているといい、イキイキしている。

構造、意匠、アート、建築の垣根を超えて、ついには自分自身で心地よい空間をつくりたいという思いが湧いて来ている。

大学時代から参加しているロックバンドでは、ボーカルとハーモニカを受け持つ。構造家正木健太さんのクリエイティブな活動は、音楽も含めて全方向を向いている。